第１学年３組　生活科学習指導案

１　単元名　　「みんないっしょに」

２　単元目標

〇自分の一日の生活を振り返り、規則正しく健康に気をつけて生活することができる。

〇家の人といっしょに仕事や趣味のことをする中で、家の人といっしょにしたり、自分の役割が増えたりすることの喜びを感じるとともに、家の人の大切さに気付き、家の人のために進んで役割を果たすことができる。

生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気づき
・自分の一日の生活を振り返り、健康で規則正しい生活を送ろうとしている。 ・家の人を大切に思い、自分のできることで役に立とうとしている。	・家庭生活やそれを支えている家の人のこと、自分のことや自分でできることなどについて考え、家庭生活が楽しくなるように工夫し、それを振り返って友だちと伝え合っている。	・家庭生活を支えている家の人のことが分かり、自分でできることに気付いている。

３　ひびき合うこどもたちをめざすための指導の工夫

低学年ブロックテーマ　「感じる心、素直に表現する自分」

・人の言動に何かを感じる姿

・自分の思いや、他者からの刺激に対し、素直に表現する姿

研究課題　　「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」

手立て…子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

（１）　単元について

本単元は、学習指導要領の生活科の内容における（２）に基づいている。

> （２）家庭生活を支えている家の人のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。

朝の会で行っているミニ発表会では、家の人のことが話題として出ることがある。「お母さんに～を買ってもらいました。」「家族で～に行ってきました。」と家の人が話の中に出てくるが、家の人の大切さや思いを語るような考えは出てこない。子どもたちにとって、家族は何かをしてもらえるのが当たり前であり、あまりにも身近であるため、その大切さに思い至らないようである。本単元では、まず自分の一日を振り返り、元気に生活するための作戦を実行する。「早く寝る。」「ゲームをやりすぎない。」など、自分の生活を自分で見直して改善し、実行していく経験をもつ。そして、自分の一日を振り返ったときに、家の人と一緒にしていることがあることに気付かせたい。一番近くにいる家の人との関わりを見つめ直し、一緒にすることの楽しさや嬉しさを感じてほしい。家の人について、今まで気付かなかったことや自分の思いを認識していくうちに、自然に自分から「何か役に立つようなことをしてみたい。」といった、自分から家庭に関わろうとする意欲を育てていきたい。子どもたちによっては、「やりたい。」「やってみたい。」という気持ちが先走って、自分のことがおざなりになってしまうかもしれない。そういったときには、自分の生活を改善したことを思い出させたり、自分の上履きを洗うことや食器を片づけることなど家の人にやってもらっていたことに気付かせたりしながら、自分のことをしっかりやることも大切であることに気付いてほしい。また、「やりたい」という気持ちを大事にしながらも、家の人を大切に思う気持ちが活動へと結びついていることを学級の中で共通理解していきたいと思う。実際に家の人が今までやっていたことの一部を体験した結果、家の人の役に立っていることを実感する喜びと家の人の大変さにもふれていきたい。本単元の学習体験を経て、家の人に対する自分の思いが募っていき、家の人への感謝の念が生まれてほしいと思う。学習が終わっても、家の人への思いが消えずに家庭のためにできることをやろうとする子どもたちになっていてほしいと考えている。家族が自分にとって大切な存在であり自分が家族のためにできることがあることに気付けるような学習の流れにしていきたい。

②　指導について

本単元では、自分の生活を振り返るだけでなく、友だちの生活を知ることで意外な違いや共通点を見出すと考えられる。「あれ、そんなに早く寝るの？」「朝ごはんのあと、歯を磨かないの？」など、不思議に思うことも多いはずである。それが自分の生活を改善する材料となり、「元気 100%さくせん」を実行する意欲

にしたい。それぞれが家庭で活動したことを報告したり発見したことを交流し合ったりすることで新たな気付きがあり、それが次の活動へとつながるようになると考えられる。単元を通して、意見交流を活発にしてお互いが刺激し合えるような話し合い活動を行っていきたいと思う。

子どもたちの家庭にはあらかじめ学習のねらいを伝え、一緒に過ごす時間を作っていただくと同時に子どもたちにたくさん声をかけていただくことをお願いする。一緒にいることが当たり前であった家の人について徐々に目が向き、自分の生活に家の人が多く関わっていることを感じていくようにする。そして、一緒にすることが嬉しい、楽しいといった思いを語ることで、もっと家の人と一緒にしたいという思いを膨らませたいと思う。その中で、「ありがとう。」「助かったよ。」などの声をもらえた子どもたちは、自分が役に立てたことや喜んでもらえたことを嬉しく思うだろう。その思いを次の活動意欲にして、自分から家の人と協力していく家庭生活を経験できるようにしていきたい。

１年生という時期を配慮すると、自分から見た家族という視点が自然である。自分の生活を中心にしながらも家の人の存在に気付けるよう家庭と連携しながら進めていく。徐々に自己の内面の中に家の人への思いが生まれるようにしていきたい。個々の内面の変容や高まりを子どもたちが授業でうまく表現できるように話し合いの場を工夫する。友だちに自分がどんな活動したのかを伝えるときに、実際にやって見せたいと思うだろう。その際は、実演を交えながら伝えられるように配慮し、学級のみんなが一人に注目できるような場を設定したいと思う。そして、お互いの思いがよい刺激となり、家の人を大切に思う気持ちが学級全体に広がるようにしていきたい。その思いを子どもたちの共通の思いにして、一人一人が自分でできることを考え、実行していく。「やらなければいけない。」といった責任感ではなく、自分から進んで活動できるように児童の思いを大切にしていきたい。児童の内面の変容を見取りながら、個々の気づきや思いに寄り添い、きめ細かい言葉かけや対応をしていきたいと思う。

③　研究課題にせまるために

○　切実さについて

「にこにこさくせん」では、家族と一緒に過ごしてふれあう。家の人の存在に改めて気付き、自分を支えていてくれていたことを感じたときに「自分も何か役に立ちたい。」と思う子が出てくるだろう。自分が支えてもらっているという実感が持てない子でも、「自分も何かやれそうだ。」「やってみたい。」という気持ちを意見交流で持てるようにしていきたい。そして、「にこにこさくせん２」をやろうという自主的な活動の流れにしていきたいと思う。「にこにこ」は、自分だけでなく、家族もにこにこになるようにしたいという子どもたちの思いから作戦を考えるようにしていきたい。しかし、実際に「何をしたらよいのか。」「やりたいけどどうやったらよいのか。」と思う子どもが出てくるだろう。また、「どんなことをすれば家の人の役に立つのか」、「自分は何ができるのか。」と考える子もいるだろう。「役に立ちたい。」「喜んでもらいたい。」という願いから具体的にどんな行動をしたらよいのか。その課題が子どもたちの切実な問題になってくると思う。ただ手伝いがしたいということでは目標が達成しないことに気付かせていきたい。そして、その課題に対して、それぞれ家庭でのインタビューや情報交換などを通してみんなで話し合っていく。一人一人の作戦において考えていき、問題を解決していきながらそれぞれが自分の思いを達成できるようにしていきたいと思う。

○　ひびき合いについて

本単元の活動の場が一人一人の家庭であるため、それぞれの活動を実際に見合うことはできない。しかし、そのことが友だちの活動をより知りたくなる要因になるだろう。同じ活動をしても違うやり方だったり、違う活動した友だちでも共感したりと楽しく交流することができる。友だちの活動を聞いて自分も言いたくなったり、その場でやって見せたくなったりするだろう。子どもたちがお互いに刺激し合い、自ら表現していくことで、ひびき合いが高まっていくと考えられる。

また、家の人にとって子どもが手伝ってくれたら嬉しいという思いもあるが、自分のことを自分でできることが嬉しいという思いもあるだろう。「家の人のために、役に立ちたい。」という思いが強くなるほど、手伝いをすることが活動の中心になっていくと考えられる。そのときに、自分の生活の中で自分でできることややったほうがよいことがあることに気付いてほしいと思う。話し合いの中で手伝いをすることが前提になったとき、違った考えに耳を傾けるチャンスになると思う。「そういう考えもあるのか。」という違った捉え方をしている友だちに刺激を受けてほしい。家の人の手伝いをすることは学習のねらいとかけ離れているわけではないが、手伝いをすることだけが大きな目的ではない。学習過程の中で立ち止まって全体で考える機会になると考えている。少数の意見もしくは個々の考えであっても、丁寧に聞いて自分の考えと比較したり共感したりしてまた自分の考えを新しくしていくようなひびき合いになるようにしていきたい。

４　単元指導計画（全１２時間）

時	学習活動	主な支援・留意点　　◇【評価】
１ ～ ２	じぶんのいちにちをふりかえろう ○家庭での、自分の１日の生活を振り返り、記録カードに書く。 ○友だちと記録カードを見せ合い、見つけたことや気付いたことを話し合う。	・朝起きてから夜寝るまでの生活について想起して記録カードにまとめる活動を通して、自分の１日の生活に関心をもてるようにする。 ◇自分の１日の生活に関心をもち、規則正しく健康に気を付けて生活しようとしている。 【関心・意欲・態度】
３ ～ ４	いえのひととなにをしているのかな ○家の人と一緒にどんなことをしているのかを考え、振り返りの記録カードを見ながら話し合う。 ○家の人と一緒にしたことを振り返り、記録カードに書く。 ○気付いたことやわかったことを記録カードにまとめたり、発表したりする。	・自分の１日の振り返りをした記録カードから、自分が家の人と一緒にしたことを思い出しながら家の人についての意識をもてるようにする。 ・何気ない日常的なことの中で、家の人とのふれあいがあることに気付き、家の人への思いが少しずつもてるような意見交流になるように話し合いを進める。 ◇家の人と一緒にしていることを見つけ、家の人が自分の生活にたくさん関わっていることに気付いている。 【気付き】
５ ～ ７	いえのひとといっしょにしよう ○家の人や自分がしている仕事や趣味のことをふりかえり、自分の一緒にできることを考え、実行にする計画を立てる。 ○家庭で、家の人と一緒に仕事や趣味をする。 ○気付いたことやわかったことを記録カードにまとめたり、発表したりする。	・教科書の写真などを参考にしながら、普段、家の人と一緒にしていることについて、考えることができるようにする。 ・家の人と一緒にしてみた中で、楽しかったことや嬉しかったことについて話し合うことで、家庭の温かさにつちえ考えるようにする。 ◇家の人がしている仕事や趣味に関心をもち、自分も一緒にしようとしている。 【関心・意欲・態度】 ◇家の人がしている仕事や趣味のことがわかり、家の人と一緒にすることの楽しさに気付いている。 【気付き】
８ ～ １ ０	じぶんでできることをしよう ○家庭生活において自分でできることを考え、発表する。 ○家庭において、計画したことを実行する。 ○家庭で実行したことを話し合う。	・教科書の写真などを参考にしながら、自分でできることについて考えることができるようにする。 ・自分で実行したことについて発表し合う中で、これからも続けたり、あたらなことに挑戦したりしようとする意欲を高める。 ◇家の人のために、自分でできることを考え、計画を立て、家庭生活が楽しくなるように工夫しながら実行している。 【思考・表現】 ◇自分が家の人に支えられていることや、家庭の中での自分も役割に気付いている。 【気付き】
１ １ ～ １ ２	ありがとうをとどけよう ○感謝の気持ちを表した手紙を言えの人に渡し、家の人の願いに気付くとともに、これからも自分の家庭での役わりを積極的に果たそうとする意欲をもつことができる。	・家庭により環境が異なるので、家の人からの手紙を依頼する場合には、十分配慮して実施する。 ◇自分の家庭生活を支えてくれている家の人に、感謝の気持ちをもち、手紙で伝えるとともに、これからも自分の家庭での役わりを果たそうとしている。 【関心・意欲・態度】 ◇家の人の自分への思いや願いに気付いている。 【気付き】

5　単元構想

１年　生活科　「みんないっしょに」（全１２時間）本時　８／１２

◎単元のねらい
○自分の一日の生活を振り返り、規則正しく健康に気をつけて生活することができる。
○家の人といっしょに仕事や趣味のことをする中で、家の人といっしょにしたり、自分の役割が増えたりすることの喜びを感じるとともに、家の人の大切さに気付き、家の人のために進んで役割を果たすことができる。

（「早ね早おき朝ごはん」のリーフレットを見ながら）夜、遅く寝る子はいないかな？→手を挙げる子が多い。
自分の一日をふりかえってみよう。「わたしの一日しらべ」

家庭との連携
休日の生活調べ

改善点
・寝る時間がおそいな。
・ゲームの時間が長いかも。
・帰ったらすぐにしたくしよう。
・朝ごはんをしっかり食べよう。

友だちのいいところ
・早く寝ているね。
・ゲームの時間がきまっているんだね。
・帰ったらすぐに明日の用意しているね。

家の人といっしょにしていること
・ごはんを一緒に食べたよ。
・妹と遊んだよ。
・一緒にお風呂に入ったよ。

やってみよう。**げんき 100%さくせん**

家の人と一緒にしているね。
ぼくは何を一緒にしているのかな。
しりたいな。

○寝る時間を早くしたら、朝起きれたよ。
○ゲームの時間を決めたら、早く寝れたよ。
○学校から帰ってしたくしたら、忘れ物がなくなったよ。
○朝ごはんを食べたら、朝から元気が出たよ。

家庭との連携
一緒にしたこと調べ

○作ったコマで遊んだよ。○一緒にごはんを食べたよ。
○犬の散歩に出かけたよ。○料理を手伝ったよ。
○お母さんと買い物に行ったよ。

これからも元気に生活できるように、げんき 100%さくせんをやっていこう！

・一緒にやると楽しいね。
・一緒にしていることがたくさんあるね。
・ぼくと同じだね。違うね。

家の人への思いを持ち、自分だけでなく家の人も「にこにこ」になるようにがんばりたいという意欲を高めていく。

家の人と一緒にしたことをもとに、家の人と過ごす喜びや家の人の大切さに気がつくきっかけとなるようにする。

もっと、家の人と一緒にやってみたいな。
にこにこさくせん

家庭との連携
活動「一緒にやりたいこと」

＜家族の役に立てたこと＞
○買い物に行ったとき、荷物を持ってあげたよ。
○料理を一緒にしたよ。やってみたらできたよ。
○一緒に掃除をしたよ。喜んでくれたよ。

＜一緒に過ごして楽しかったこと＞
○一緒に買い物に行ったよ。
○お父さんと遊んで楽しかったよ。
○一緒にごはんを食べたよ。

家の人と一緒で楽しかったこと、嬉しかったことを学級全体で共有し、家族への思いが高まるようにする。

やりたい、やってあげたいといった気持ちを大事にしながらも、自分のできることや元気 100%作戦の大切さに気付けるような話し合いをする。

切実な問題

喜んでもらえると嬉しいな！
もっとやってみたいな。何をしようかな？

家庭との連携
インタビュー「やってみたな。やっていいかな。」」

＜やれるかな。どうしようかな＞
・お母さんが全部やるから、やれることがないよ。
・時間がないよ。
・やりたいけど、やったことないから自信ないな。
・自分のことしっかりやってほしいと言われているよ。

＜やってみたいな。できそうだな。＞
・お母さんが大変そうだから、洗濯物をたたもう。
・お風呂掃除をやってみようかな。
・ゴミ出しを頼まれたことがあるからやってみよう。
・友だちのやっていたお手伝いがおもしろうそうだな。

自分のできることをやってみよう！にこにこさくせん２

家庭との連携
活動「自分でできることをやってみよう」

・一人でできて楽しかったよ。
・お母さんが、喜んでくれて嬉しかった。
・お母さんがいつも全部やっていたんだね。

自分の上履き洗うこと、ふとんをたたむことなど自分のことをしっかりやることも家族のためになることに気付き、進んで自分の役割を果たそうとする意欲がもてるようにする。

☆家族みんなと一緒だと嬉しいな。一緒にやると、楽しいな。
☆これからも、自分でできることはやろう。
☆家族のためになることをこれからもやってみたいな。
☆お母さんに、「ありがとう」って言いたいな。

6　本時案（別紙）
7　実践を終えて
○単元構想の修正とひびき合いについて
本単元を通して、児童の活動には「〇〇さくせん」という呼称をつけた。各家庭で、主体的に活動できるようにするためである。「いっしょにしていることしらべさくせん」は、家族と一緒にしたいことを考え、実行する活動であった。家族と過ごす楽しさや家庭の中の役わりに気づく児童が出てきた。そして、もっと家族を喜ばせたいという気持ちが児童の中で大きくなってきた。そこで、次の「にこにこさくせん」では、家族に喜んでもらえそうなことを考え、それぞれ活動した。買い物の袋を持ってあげる児童や皿洗いをする児童がいる中で、宿題や習い事の練習をしてきた児童がいた。どちらもお母さんが喜ぶからという理由であった。また、全体に感想を聞いたところ、「ほめられたいから」という理由で活動していた児童も少なくなかった。
単元構想では、「びっくりにこにこさくせん」の活動で、自分のできることを考えて出し合う学習に進むようになっていた。しかし、自分のことから離れられず家族に目が向かない児童や「やってみたい。」「ほめられたい。」といった気持ちだけの児童には、家族について考え、家族に対する思いを持つことが大事であると考えた。まず、それぞれの活動を分類する作業を全体で行うことにした。家族のために役立つものと、自分のためのことに分けた。分け方を児童が見つけられるように、児童のそれぞれの活動を撮った写真を使って、貼る位置を分けていくようにした。すると、「自分の上履きを洗うことは、家族に役立つのか。」という問題が生まれ、それをきっかけに「役に立つ」ということがどういうことかを意識できるようになってきた。自分の上履きを洗うのは、自分のためであるという意見が主流だったが、話し合いの中で、自分が洗わなければ家族が洗うことになるから役に立っているのではないかという意見が多数になっていった。宿題や習い事の練習とは違うという共通認識ができた。最初の単元構想のままでは個々の発表で終わっていたが、修正した結果、お互いの活動に目が向き違った考えにも耳を傾けられるような、ひびき合いのある話し合いができた。
次の活動を考える学習では、どうしてその活動をしたいのかを話し合わせた。児童の中には、「今度赤ちゃんが生まれるから、お母さんを助けてあげたい。」と母親を大切に思う意見などが出された。その結果、次の作戦は家族のために役立つことをする活動であることが、全体の共通の目的であることを確かめることができた。
○成果
本単元は、冬季休業を挟んで翌年も継続して行った。冬季休業の間、児童は家族とふれ合う時間が増えるため、本単元の学習を生かすことができると考えた。休業明けの振り返りでは、それぞれの良さに気づくことができた。また、保護者からのコメントでは、「ありがとう。」「助かった。」など、児童への感謝の言葉が見られた。親からの感謝の言葉がとても嬉しかったようで、家族の役に立てたことを喜びとして感じ、充実感を持たせることができた。
単元を通して、「やりたい。」という意欲を維持しながらも、家族を大切に思う気持ちが活動に結びつくような授業の流れとなるよう努めた。様々な思いを認めながらも、家族への思いを語っている児童の意見に焦点をあてることで、自然に家族について考えるような意識を持たせることができた。活動してきた結果、家庭の仕事をすることの大変さに気づき、家族にお礼のお手紙を書くことになった。「いつも、ありがとう。」「これからも、助けたい。」といった家族を大切に思う内容が見られ、児童の心の成長が見られた。
授業中の児童の発言や学習カードから、児童の見取りを丁寧に行った。その結果、一人一人の思いを授業に生かしたことで、話し合いが活発になったり自然な流れで共通理解が図れたりすることができた。それぞれ、活動場所や活動内容が違っても一人一人が目的意識を持って取り組み、お互いに関心を持ちながら友だちの良さに気づくことができた。
○課題（切実な問題について）
本単元は、家庭での活動が多いため、保護者の協力が不可欠である。単元に入る前に、学習の目的や内容については、学級便りで伝えた。しかし、なかなか協力が得られない家庭も見られた。様々な事情によりやむを得ないところもあるが、もっと早い段階で説明したりお願いしたりする必要があった。また、家庭の協力が難しい児童に対する支援の工夫も考える必要があった。
児童の中から、「家族の役に立つためには、どのような活動をしたらよいか。」という問題が大きくなり、切実な問題となると考えていた。新しい「〇〇さくせん」をしていくうちに、徐々に家族への思いが高まると思ったが、それよりも「やってみたい」という活動への興味が大きかった。単元構想を修正して、それぞれの活動を分類する中で、家族の大切さに気づくきっかけになるようにした。その結果、次の「びっくりにこにこさくせん」では、「どうしたら家族の役に立てるか。」という切実な問題へとつなげることができた。当初、目的から活動へと考えて設定した切実な問題であったが、児童の思考の流れから活動から目的が生まれた結果となった。こうした問題設定は、低学年では特にありうることであり、児童の実態や思考を踏まえて単元の中心となる問題を練る必要があると改めて感じた。
授業の記録は模造紙に行い、活動した写真や絵も貼った。児童がいつでも見れるように掲示しておき、毎時間、授業で活用できるようにした。しかし、児童の思考の流れ、特に変容が見てわかるようにすべきであった。活動の違いや共通点などがわかるようにしたが、児童の思いが変容したところや新しい気づきなどがわかりづらい記録となってしまった。単元構想と同様に、児童の思考の流れがわかるような授業記録（黒板掲示）の計画を事前に練っておく必要性を感じた。